

学位論文題名

人生の終焉にある低所得高齢者

— 尊厳軽視の実態 —

学位論文内容の要旨

人間にとって「老い」は不可避的なものであり、突然の死を迎える以外の多くは加齢とともに「老い」、そして「死」を迎える。人間は生まれる時と死ぬ時は社会的地位や経済力に左右されず、いずれの人にも皆平等に出現するというような言説がある。しかし、「裸の状態であまれる」ことと、「最期は何も持たずに一人死んでいく」ことはいずれの場合も平等であるとしても、それは最終的な結果の一部分・一側面のみが平等であるだけであり、そこに至るまでの人生というプロセスに生じている不平等や不公正の存在はどのようなのかという問題を残している。はたして「死ぬ時は結局、皆同じである」として、この間のプロセスに生じた不平等や不公正はすべて棄却できるとした結論が導き出されるだろうか。ましてや、死にゆかんとする際の状況すらも高齢者の経済力に左右されるという現状をどのように考えればよいのであろうか。

本論文の目的は、働いて高齢期を迎えたが、結果として低所得状態を余儀なくされている高齢者の生活実態を明らかにしていくことである。すなわち、高齢者がいままさにどのような生活を送っているのか、そこに低所得状態(貧困)がどのように影響しているのか。さらに、その状態が人生の終焉をどのような形で終えることと結びついていくのかに注目をしていく。そして、その中から高齢者の経済的状態や階層性が人生の終焉にもたらしている不平等の現状を明らかにし、その不平等は人の尊厳の軽視に帰結することを提示することである。

この研究目的にそくし、第1章においては高齢者の死にゆきかたの実際を、孤独死や葬儀費用の現状などを通して、高齢者自身の生活背景が死にゆき方の現状とどのように関わるかの側面を提示した。終の棲家の選択では高齢期の諸ニーズを満たすにも経済的状況が問われ、選択の最初から多くを望むことができない中で生きることを要求されている。また、近年の葬儀は簡素化傾向があるものの、一般的な葬儀費用は100万前後必要となる現状からは、低所得高齢者の死は一般的な葬儀自体を困難とし、地域からも家族からも遠いものとなりつつある現状を述べた。

第2章では都市部の在宅で生活する高齢者の生活現状を明らかにするために、高齢者約1,300名に対するアンケート調査と約50名に対する面接調査を実施した。そこでは年金の二極化が指摘されると同様の実態が存在し、調査からは一見すると必要なものは外見上なんとか充足できるように映っていても実際の生活には「ゆとり」は一切なく、社会における人間関係の広がりがない限定的な人間関係の中での生活を余儀なくされている現状を述べた。また、自分自身の「死」や「終焉」に対しても「他者に迷惑をかけることなく、多くを望まず、無縁仏にでも」といった語りが多く聞かれたことが特徴的あり、年金収入による差が顕著となることを強調した。

第3章では、地方で生活する高齢者に焦点をあて高齢者夫婦9世帯と一人暮らし高齢者

15名に対する面接調査を実施し、前章と同様の在宅高齢者の生活現状と人生の終焉への課題を析出した。調査結果から地方高齢者の生活も都市部高齢者と同様に実際には年金収入の多寡が現状の生活を規定していることを述べた。また、先行研究等で明らかにされているように、食費や居住費の支出割合を中心とした生活で、教養娯楽費や交際費に支出する余裕がないことも追認できた。さらに、高齢者の経済力を規定するリタイア前の職業と社会階層性が現状生活を創り出し、人間関係の広がりにも大きく作用する現状を述べた。

第4章では、施設利用の高齢者の生活現状と施設に内在する格差の実態を北海道内のユニットケア施設（新型特別養護老人ホーム）65施設に対する悉皆アンケート調査と、個室へ改修予定のある施設の利用者家族137名と待機者78名に対するアンケート調査をそれぞれ実施した。高齢期の生活環境として「個室」が望ましいとされる政策動向の中で、実際には高齢者の経済的要因で多床室を選択する現状があり、「個」の尊重や「尊厳」への配慮が十分に出来ない現状は、高齢者のその人らしさを実現することから遠いことを述べた。

第5章においては、在宅であれ施設利用であれ低所得高齢者の切りつめた厳しい生活現状は人生の終焉に不平等をもたらし、その不平等は「尊厳軽視」に帰結することを述べた。

本研究で捉えた高齢者の生活実態を「尊厳の軽視」の視角から分析すると、それはどのような状態のことを言うのかを以下のように提示した。①低所得であることは、基本的な衣食住そのものを切り詰め、いわゆる高齢期をただ生きるのみとさせるような状態を生み出し「その人らしさの尊重」ある生活を困難にさせる。②低所得であることは、余裕のない生活状況をもたらし、結果として関係を希薄なものとし、親族との円滑な交流すら疎外させる関係性の遮断という状態を生み出す。③低所得であることは、近隣との付き合いも希薄なものとし、限定的なコミュニティの限られた人との関わりにとどまるという状態を生み出す。④低所得であることは、自分自身の死にゆきかたの選択肢を限定的にさせるといふ尊厳が軽視された状態に帰結する。⑤低所得であることは、自分自身の生活に折り合いをつけていく際にも、生活全般に「自分らしさ」を奪ってしまうという状態をもたらす。⑥低所得であることは、社会関係の遮断を引き起こされ、関係性の中からその人自身が「価値ある存在」と肯定できるという感覚を奪ってしまうという状態をもたらす。

もちろん、以上に提示したものは、いつもあてはまるということではない。また、単に所得という経済要因のみが引き起こしたのではなく、いずれもさまざまな社会的、政治的な複合的な作用の帰結としてもたらされたものである。しかし、しばしばあるいは往々にして人間の「敬うべき価値ある状態や特性あるいは本質」を犯すことに帰結するのである。

本来、われわれの日々の生活においては「生命・自由・幸福追求」の保障と、その根幹に「人間の尊厳」の尊重が存在する。またそれを現実の生活の中で担保するのが、憲法第25条でもあろう。しかしながらその尊厳が、人生の最終局面において犯されているのである。それゆえに、高齢社会にある現状においてこそ、いま一度、人間の尊厳とは何であるかを問い直すことが必要なのではないだろうか。従来、抽象的に理解されがちである「尊厳」を生活実態の把握から具体的な問題として提示したことは、対人援助において自明視されている価値規範を規範として踏まえておくにとどまらず、実際の具体的実践に結びつけるための検討への示唆につながるものと考えられる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 松 本 伊智朗
副 査 教 授 木 村 純
副 査 教 授 青 木 紀(名寄市立大学)
副 査 教 授 大 友 信 勝(龍谷大学)

学位論文題名

人生の終焉にある低所得高齢者 — 尊厳軽視の実態 —

<審査内容の要約>

本論文は、北海道における高齢者の生活調査から高齢期の不平等と貧困の現実を把握したうえで、その先にある「人生の終焉」の問題を考えたとき、改めて尊厳の観点から高齢期の生活保障を捉えなおす必要を提起した実証的研究である。高齢期の貧困を、具体的な聞き取り調査によって検討した研究は多くはない。その中で調査を通して把握された事実は政策的、実践的に重要な意味があり、この点は評価しうる。また「尊厳」概念の捉え方には若干の課題が残るものの、実証研究の延長に「尊厳」の問題を提起する視角は、抽象的に理解されがちである「尊厳」を具体的に把握することを通して、ソーシャルワーク研究の発展に資する意欲的な試みであると評価しうる。この点は現在の社会福祉専門教育のあり方を、実践の観点から批判的に組み替えていく理論的可能性を内在させている。これらの点から審査委員会は、著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。

<調査から示されたこと>

本研究での調査は北海道内の都市部、地方（農村部）、介護施設で行われ、高齢者の生活の場を網羅している。都市部では一人暮らし高齢者約 1300 名に対するアンケート調査と約 50 名に対する面接調査、地方では高齢者夫婦 9 世帯と一人暮らし高齢者 15 名に対する面接調査、介護施設では北海道内のユニットケア施設（新型特別養護老人ホーム）65 施設に対する悉皆アンケート調査とある施設の利用者家族 137 名と待機者 78 名に対するアンケート調査が、それぞれ実施されている。これらの調査の分析から示されたことは、以下のように整理しうる。

第 1 に、社会サービスの利用実態と利用の希望について、所得階層による格差がみられることである。これは介護サービス利用のみならず、「ついのすみか」の希望においても同様である。相対的に低所得階層ほど、費用のかかる在宅ではなく病院・施設を希望する傾向にある。また介護施設の費用負担の重さを背景に費用負担が増加すると多床室を選択する傾向があり、これは介護施設において個室を重視するという近年の考え方と政策方向が、低所得層では実現が難しい現状を示している。

第 2 に、高齢者の人間関係の構築や社会活動への参加、社会的ネットワークの形態が、個別の経済的

基盤に規定され、社会階層的格差がみられることである。例えば日常的な家計の「やりくり」においては、これまでの生活構造研究と同様に、他者との関係を維持するための交際費を優先させる傾向があるが、一方で低所得層の場合交際を制限、縮小、断絶させるという対応がとられる場合がある。また生活の聞き取り調査から、経済力の高低と人間関係の多寡を組み合わせた4つの象限に分類して職歴や日常生活、「ついのすみか」を含む将来の見通しを分析すると、個別の経済的基盤が社会参加や人間関係の構築、人生の終焉に向けた物的・精神的準備のあり方を強く規定していることが確認された。

第3に、こうした高齢期の生活の諸相の社会階層的格差は、都市、地方、介護施設のいずれにおいても共通して確認されたことである。

<本論文の特徴と意義>

このように、北海道における高齢者の生活調査から低所得での生活と不平等、貧困の現実を丹念に描いていること、そしてこの調査は、都市部、地方、介護施設と高齢者の生活の場を網羅していることが、本論文の特徴と意義の第1点である。

ところで、こうした高齢期における不平等と貧困の現実・社会階層的格差を、その先にある「人生の終焉」のあり方の問題として考えたとき、著者は「尊厳」という観点から改めて高齢期の生活と社会福祉のあり方を問い直す必要があることを提起する。この点が本論文の特徴と意義の第2点である。

「尊厳」はソーシャルワーク研究において中心的な概念のひとつであるが、抽象的な価値規範として先験的に設定される傾向があった。しかし著者は、生活調査の積み重ねの延長に尊厳の問題を提起している。これは人間の尊厳を抽象的なレベルではなく、社会的な不平等・不公正と貧困の現実態と関わる具体的な問題として議論しうる視座を構築するための意欲的な試みであると評価したい。この点に意識的に踏み込んだ先行研究は、当該分野ではほとんど存在しない。この視座はソーシャルワーク研究を具体的な政策と実践のレベルで展開、発展させていく際に不可欠であるし、また社会福祉専門教育の展開にも必要な理論的作業であると考えられる。

ただし、本論文にはいくつかの不十分さがある。第1に、尊厳という概念に未整理な部分が残る。この点は新しい試みには一定程度不可避であると判断し、今後の課題としたい。第2に、尊厳という観点から実証的な分析が説得的であるかどうかという点では、「地方」の面接調査での分析の成功に比して、介護施設での調査では甘さが見られる。この点は、今後の調査研究の継続に期待したい。

<結論>

いくつかの不十分さがみられるものの、本論文は上述の特徴と意義のように先行する当該分野の研究の発展に大きく資すると判断される。よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。

以上